
逢魔時の夜

紅 恋

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逢魔時の夜

【Nコード】

N2735P

【作者名】

紅 恋

【あらすじ】

あなたは世界がもう一つあると聞いた事はありませんか？

新藤彰はその日後輩から告白を受けていた。しかしその日常は、激しい頭痛と目眩で崩される。

頭痛が収まったとき、そこはもう今までいた世界とは違っていた彰の命と運命はどうなるのか

その目眩から始まる

世界は1つではない。突然そんな事を言われても理解できないであろうが、無理も無い

世界は辛くて、悲しくて自分の分身の世界を作り出した。そこに世界は辛さを半分押し込んで

これはそんな世界に招かれた、ある種不運な青年の話
そうそれは黄昏時の世界の話・・・

俺こと新藤彰^{しんとうあきひろ}は、日々まるで幽霊のようにふわふわと生きていた

この世はつまらない、そう思う時は多々ある。それについては自分でその度に何、中二病になってんだと自分でツッコミを入れるというしょーもない事をすることになるのだが

別に自慢している訳ではないが、自分は身体能力や頭はいいと思っている、何やっても

それなりに出来てしまうせいか熱中する事も無い

そんないつもの日常をたんたんと過ごしていたある日、俺はあの世界に巻き込まれた・

~~~~~自分の世界が変わる1時間前~~~~~

学校の校舎裏、俺は呼び出されていた。別に不良となにかし合うつもりはない・・多分

家に帰る際、靴箱を開いたら手紙が入れられていたのだ。

そこには、この後後者裏に来てと女の子らしい字で書かれていた

ここに来る事になった原因を思い出しながら彰はグラウンドの方からこちらに向かってくる

女の子に気がつく。

「あれは誰だろ？」

女の子が彰の前に立ち止まる。端から見ても顔が赤くなり、高揚しているのがわかる

どうもこの娘が手紙の主らしい

少女は深く深呼吸をして顔をあげた

「先輩！好きです。私とつき合ってください。」

やはり、告白だった彰は10秒ほど困ったように黙っていた。

「ごめんな、君の気持ちには答えられない」

「なんですか！先輩今つき合っている人いないじゃないですか！」

「そうだけどね、でも好きでもない人とつき合えないから・・・それに俺にも好きな人がいるから」

彰はそういいもう一度君の気持ちには答えられないと言う

少女は瞳に涙を溜め、走り去って行くーーーー真っ赤な夕日を背に浴びながら・・・

その場に残された青年は一言帰ろうと呟いてその場を立ち去ろうとする。

ーーーーが、突然頭痛が彰を襲う

「あっ！・・・っが！！！」

言葉も出せないほどの頭痛、彰は目眩に耐えられず地面に倒れる

ドスッー倒れたその瞬間世界が一回転したように彰は感じたそして頭痛は収まった・・・彰に少しの違和感を残して

「なん・・・だっただんだ？今の」

彰は立ち上がり、服の砂を払い落としながら校門の方に向かう

「ーーーーなっ！！！」

彰は立ち止まった。それもそのはずいつもならこの時間帯校門は生徒で溢れかえっているはずなのに、人一人もない

「なんだこれは!？」

気がつく与人だけではなく、虫の鳴き声もしない、空を見渡しても鳥がない

「何なんだこれは・・・」

彰は職員室に向かって走った。この時間帯なら教師がいるはずだ

しかしそこにも人はいなかった

まるで夢の中のようなだったが頬を掴ってもただ痛いだけ

ここは現実だ!でもそれならこの世界は何なんだ?

まるで、彰だけが世界にいるみたいだ・・・この世界に取り残されたいだ

「なんなんだこれは――――――!!!!」

## 生と死

「なんなんだよ・・・ここは・・・」

俺は無気力にそう呟いた。だがここで一人突っ立ってても状況は変わらない

とりあえず、この時間帯ならかならず人がいるであろうショッピングモールへ行こう

この街のショッピングモールはそこら辺にある物とは、一線を越えていた大きさがすでに度が違う

大きさは軽くそこら辺の学校よりデカイそれもそのはず、この建物の中には軽く遊園地的な物もあるのだから、他にも驚く物があるそれは売っている物だ。ここには日常的に使う物から何これと思うような専門的な物まである。聞いた話によると骨董品として刀なども売っているらしい。ここをすべて回るだけで1日は確実に掛かると言われている

「あはは・・・そうだよな・・・学校にも人がいなかったんだここに人がいるはずないよな・・・」

モールに着いた彰は笑いながら言った・・・しかし

「誰だ!？」

彰は柱の一つを睨みながら叫んだと、柱の陰から一人の男が出てくる

「いやいや、君は勘が鋭いねえ」

男の歳は20歳前半と言った所で優男風だ

「僕の名前は鈴木利也だよろしく、君は？」

「新藤彰です。ここはなんなんですか？人が全然いないし」

「ああ君は今回が初めてなんだね？」

「今回？これは何回もあるんですか？あなたはこれに幾度か遭遇していると言っ事ですね。元の世界に戻るんですかこれは？」

「ああ、そう一遍に質問しないでくれ、時間はまだあるんだから」

鈴木さんはこの現象について詳しく教えてくれた。自分はこれで5回目だという事。この世界は夕方6時頃に発生し深夜2時に発生する前にいた場所と時間に戻される事。2〜3回に一人の頻度で俺みたいな新参加者がここによばれること。そしてここには”敵”がいること。

「敵ですか・・・それってなんですか？ゲームみたいなモンスターとか？」

冗談で言った言葉だが鈴木さんはまじめに頷いた。

「そうだ。あれはモンスターだなこれは見た方が早いと思う。もし遭遇したらすぐに逃げるよ幸い奴らは足が速くないようだから」

「もし捕まったりしたらどうなるんですか？」

「死ぬよ……」

え……と言葉が詰まる

「まさかそんなことは……」

「僕も正確な事はわからないけど、1回だけ捕まった人を見た事がある。苦しそうになって死んで行ったよ。現実ではどうなるかわからないけど、ここではそれ以降みたことはない」

二人の間に沈黙が流れる

「もう11時か早いねやっぱ人がいると時間が早く感じる」

「俺が鈴木さんとあったのが9時だったから2時間も話していたのか」

「そういえば、なぜ人がいないのに電気やライフラインが昨日しているんでしょうか？」

これはずっと疑問に思っていたのだ

これは鈴木さんもわからないらしい、ただ、普通に世界が続いている状況から生物だけを取り除いた状態を仮定してできた世界として考えているようだ

どこからともなくお腹が鳴った

「あはは、そくだよねもう11時だもんね。うん何か食べようか」

「すみません、というか何か食べる所あるんですか？」

「ん？ないよ、あるけどないと言う方が正しいか」

「っはい？と聞き返してしまった。」

「い、いや普通の人にやったら無銭飲食になるからってことでそういったまで」

「平然とこの人は何言ってるんだ・・・」

そして二人は並んでモール内のフードコートで乱暴な食事をした

## 生と死／彰の記憶／

――――現在時刻１時３０分場所モール内ロビー――――

俺たちは、再度自己紹介も含め談笑していた。

ここで知ったのだが利也は今年で２１歳になり現役の大学生だった。

「まずいな」

突然、利也は苦い顔をしてそばの柱を見つめた。

その視線の先には――――影がいた

それは”者の形”をしたモノだった

気がつくと、俺たちの周りには影がつこめいている

いつの間に！つばを飲む音がよく聞こえる

「逃げるぞ！！」

利也のおかげで俺はやっとの事でこの呪縛から抜け出す事が出来た。

「何だよあれ！」

あれが敵だよと利也は走りながら叫ぶ

敵！？あれが敵だと言っのか、あのような非現実的なモノが・・・！

その時、自分の中で何かが、切り替わった様な気がした。

「あれは、物理的に殺す事は出来るんですか？」

彰の何かが変わった瞬間であつた

ゾクツと利也の全身を寒気が襲つた。

今こいつは何と言つた！？『物理的に”殺す”ことは出来るんですか？』だと？

正気か？

「確かにあれを倒した人は見た事があるから、倒せるだろうけど・・・」

前あつた事を思い出しながら利也は彰の顔を見る

！？

今さっきとは比べられないほどの寒気が、が利也を襲つ耐えられず腕で体をキツく抱く

何なんだこいつの目は、あいつらの比じゃないほど”怖い”

無言は耐えられない・・・！

が、突然悪寒は去った

「彰君今回は逃げるのは難しいかも知れない」

今さつきから、奴らの動きが素早くなり始めている。今はまだ私たちの方が早いがどうなるかはまだわからない・・・

「利也さん、武器を手に入れましょう！」

確かにこのモールにはそういう店もある

「わかった。案内は任せろ」

二人はスピードを上げた

「—————現在1時45分場所骨董店『ガランドウ』残り15分—————」

すごい・・・ただぼーとして呟いた

彰の眼前には刀剣の類いが棚にずらりと並べられていた

「関心している場合じゃないよ時間がないから手早く選んで逃げなきゃ」

棚の向こう側から利也さんの声が飛んでくる。

確かに、でもこうも種類があると困るものがある

手始めにと、俺は目の前にあるよくファンタジーゲームで両手剣と称される剣を手取る

ズシリと腕に来る。だいたい4kgかなさすがに鍛えてはいるから片手で持てるがこれでは戦えないだろう

やはり俺には慣れ親しんだ日本刀が良いだろう。手に取った刀を腰のベルトに挿す

俺は今何を思った！？なぜ俺は日本刀を慣れ親しんだ物と思った？

キーンキーンと頭痛がする……

「俺は昔剣術を習っていた？」

そんなバカな、俺は昔剣道を学んでいた事はないはずなのに……

確か俺のじいさんの所に武道場があったはずだ……そこで習っていたのか？

でも、なぜ剣術なんだ？剣道ではなく、相手を殺すための剣術をなぜ？

「もう準備はできたかい？」

後ろからボウガンを持った利也が現れる

「なんか、彰君は様になっているねえ」

あははと笑う二人

これも、今から始まる戦いに緊張ためだ

「さあ、行こう！」

『明日に生きるために！』

二人は骨董店『ガランドウ』を駆け出して行く。

生と死、明日の為に

――現在時刻1時50分骨董店『ガランドウ』前――

影たちはざっと10体大きさはだいたい150cmの大人ぐらいだ  
まだ距離は20mはある

「利也さんはボウガンで俺のサポートをしてください」

「任せとけこれでも高校では弓道部だったんだぜ」

自慢げにボウガンを構える利也、それに合わせて腰から刀を抜く

刀の先は地面すれすれに落とす。これは、剣術の中ではあまりない  
型だ

新影流「無形の位」

息を深く吐いて高揚した精神を沈めていく

利也に目で合図する。

タツと軽い足音を残して影に向かって駆ける

一番前の影の額に矢が突き刺さる利也のボウガンだ、俺はよろけた  
影に逆袈裟斬りで斬り掛かる。

そこから、胴を払うそこで一体目が倒れふす

刀には血ノリが着いていない、こいつらは生物ではないようだ

それを見下ろした瞬間、彰の脳裏に昔の記憶が駆け抜ける

彰の横にもう一体影が倒れる、影の額には4本の矢が刺さっている

「後八体・・・」

彰は目の前の影の腹を薙ぎ片手を斬り落とす

足を薙いでは袈裟を斬りつけ首を飛ばす

そして残り2体になった時一際大きい影が彰の前に現れた。

彰はそれを前にしながら自身の記憶を辿りながら精神を高めていく

フツと短い息を吐いて突き進む

イメージは刀で空間を切り裂く感じで

「神道流 一の太刀 刃迅」

刀が神速の風をまとうて影に襲いかかる

一刀にして倒れふす地面はカマイタチが来たかの如く砕けていた

残り一体は利也さんが倒していた

利也さんがこちらに駆け寄ってくる

「すごいな、彰君は剣術はプロ以上じゃないか」

俺たち二人は戦闘を行ったせいか、興奮していた

「利也さんだつてすごいですよ、あの距離で確実に当てるなんて・  
」

後少しで終わると利也は時計を見ながら言う

自分の腕時計を見てみると確かに後5分だった

「そうだ、今持っている荷物は全部持ったまま元の場所に戻るから  
隠すもの用意しなきゃ」

二人はガランドウの中に入ってしまった

――――残り2分――――

彰は刀を剣道部が持っている様な袋に入れて肩に下げていた

二人は次こうなったらモールのロビーに集合と決めた。ここで教えてもらったんだがどうも2回目からは頭痛が少し収まるらしい  
良い事を聞いた

そこで二人に目眩が襲う目を開けた時にはそこは、夕日が輝いてい

るいつもの風景と校舎裏だった

## 二重の帰還（前書き）

ちなみにですが彰君は実家を離れて一人暮らしをしています  
つか一人暮らししてなかったら、刀を持って帰った時点でヤバいで  
すからね（刀を持っている時点でダメだからというつつこみはなし  
で）

## 二重の帰還

あの事件から3日経ったある日

土、日曜日という休みの日だったため、久しぶりに彰は、実家に帰ってきていた。

もう半年ぶりだろうか、懐かしく感じる

うちの家はかなり大きい、山一つが家の中なのである、そのため、毎日山を登り、降りするはめになるんだが・・・

まだ涼しさを感じる気温のはずが、俺の額には汗がにじみ出ていた、こつこつ歩いていると、足を一歩動かすのも億劫になってくる

やっとの事で頂上についた頃には30分は経っていた

一息ついて、汗を拭っていると、何者かが俺の懷に飛び込んできた。

「おにいちゃん、会いたかったよ」ヒナは寂しくてもう・・・」

俺はそいつを受け止めた。ヒナが、支えきれず、尻から石畳にダイブする。

「だ、大丈夫？」

この状況を作った本人が真上から俺の顔を覗き込もながら、言うこの娘は今年で14になる妹の

新藤雛だ

「ヒナ・・・大きくなったな身長も」

「でしょ！私も大人の女性になりかけているのです！」

成長し始めた胸を前に張り出しながら宣言する我が妹。

可愛くなったものだな、この歳の娘だ彼氏とかできたのだろうか  
ダメな男だったからお兄ちゃん泣くぞ？

まあそれは良いとしてだ、今はこの状況をなんとかしなければなら  
ない

「なあ、ヒナよなぜ君は私を押し倒したまま動かないのですか？」

そういわれて今の状況を理解したのか、顔を火が出そうなくらい赤  
くしながら飛び退く

俺はそれを見ながら服に着いた砂を払い落とす。

今さっきのタックルは正直言って痛かった、背中に背負った刀がも  
ろにヒットしてヤバかったぞ・・・

俺とヒナは他愛もない話をしながら家のドアを開ける・・・

「おおおおおおおじい様は寂しかったぞおおお良く帰ってきた  
な、あきらあああああ！！！」

家の奥の方から、ドタドタと走ってくる音と叫び声が聞こえる、あ  
の人は本当に70過ぎのおじいさんか？

捕まるとやっかいな事になりそうなので早々に立ち去る

やはり木で作られたこの屋敷は落ち着く

1分ほど廊下を歩いて、一つの部屋の前で立ち止まる。

そこは家族がいるはずの部屋だ

彰は引き戸に手をかけ一気に開ける

「ただいま」

その一言、帰ってくるのは家族の暖かいおかえりという言葉

俺は本当にあの世界から帰ってきたと言っ事を実感した

## 告白

朝日がまぶしく、鳥のさえずりが聞こえる早朝  
道場から声が響く

離れの道場では、彰が木刀を片手に素振りをしていた。  
ダッダツと踏み出す音がシンとした空気に響く

素振りをしながら彰は、昨日の出来事を思い出していた。

「父さん、聞いてほしい事があるんだ。」

そう俺は、話を切り出していた。

父は無言でこちらを向く、どうやら話せということらしい

「俺、昔の事、思い出したよ。俺が何をして、何で記憶が無かったのか、この家がどんな宿命を持っているのか」

彰は知っている事を包み隠さず、告白した。

この世界には、霊という存在がいる俗には、死んだ者の魂、妖怪と言った存在だ。

まれにそういう存在が人に害をなす、その時動く人達がいるそれが、新藤家・・・いや、神道家だ

そう神道家は、代々続く力を持った陰陽師だったのである。

しかし、時代が刻一刻と変わり、強い力を持った妖怪も陰陽師もいなくなっていた。

その中、一際大きな力と人並み外れた才を持つ兄妹が生まれた。それが彰達だ。

一番上の彰は霊力も剣術にも秀でており、次に生まれた双子の姉の双葉は、体はさほど強くなかったが、霊力は尋常じゃなかった。妹の雛は、姉とは反対で、霊力はさほど無いが、体が強く剣術に秀でていた。

兄妹は、常に共に行動し、幸せに暮らしていた

――――が、彰が13歳になる時事件が起きた

屋敷の結界内に強力な妖怪が出たのだ。

妖は、いずれは自分たちを滅ぼしかねない存在として、彰達を恐れた。

その時彰達は、山の中で遊んでいた。しかし、運命は悲しく残酷であり、兄がふと目を離れた隙に双子は、妖に襲われた。

・・・たった10秒、目を離れた隙に・・・だ！

彰が振り返ったときには、あたりは血で深紅に染まっていた。地面に倒れる双子とその周りで群れている妖怪達を見た彰は・・・

—————激怒した

彰は、天才だった。13歳という、歳にして既存の術師が使った技は、一部を除いてほとんど言っていないほど習得し最強の陰陽師達の仲間入りさえしていたのだ。

その彰が、激怒し力を暴走させたのだ。

結果とすれば、数十匹いた手練の妖達は死に、兄妹達は生き残った。その周囲100mを焦土と化しながらも……

彰は、自分の強大な力を制御できず暴走させた。

その危険性を知った大人達は、彰の記憶と力を封じた—————がちょっとしたきっかけで、彰は記憶を取り戻し、力も目覚めさせた。そう3日前の事件で、だ。

彰は、あの世界の事も伝えた。今はとにかくあの世界について資料が欲しいからだ。

「これが俺の記憶のすべてです。」

父は驚いたように目を見開いていた—————

## 神道流の技

考え事をしながら、素振りを始めて30分は経つだろうか、空に太陽が出てきている。

今はまだ7月の初めあたりだから6時ぐらいだろうか。

体も暖まってきた事だし、型の練習でもするか

神道流剣術とは陰陽師専用の剣術だ。

これはいかに、大量の妖を倒せるかを、研究し追求し研磨して研ぎすまされた1本の日本刀の様な流派

なのだ。そう、剣術自体がもはや人間離れしているのである。

神道流剣術には、大きく分けて二種類ある、それは一刀で扱うか、二刀で扱うかだ。

基本的に俺は二刀を好んで使っていた。

型をおさらいしていた時、道場の扉が音を立てて、開いた。日の光が差し込んでくる。

扉の所には、ヒナが袴姿で立っていた。

「おはようおにいちゃん！」

ヒナが元気よく抱きついてくる。

「おはようヒナ、今汗臭いからあまり、抱きつかない方がいいぞ？」

笑顔で忠告してやったが、ヒナは俺の言葉が聞こえない振りをして  
いるのか、より一層

腕に力を込めて抱きついてきた。

「ヒナどうしたんだい？こんな朝早くから」

その質問に答えるかの如く、2本の木刀を掲げ、ニカツと笑う。

どうやらヒナは俺と手合せをしてくれるらしい

広い道場の中で俺とヒナは、向かい合っていた。

ヒナは、2本の木刀の切っ先を下に向け、だらりと前傾姿勢をして  
いる。

対する俺は、木刀を片手で一本持ち、ヒナと同じ前傾姿勢をして  
いる。

お互いに、相手の呼吸を掴む、行動を読み合っているのだ。

数瞬の間、先に動いたのはヒナだった。

懐に一気に攻めてくる、――瞬歩だ！

一歩、たった一歩だけで6mも移動し、俺の領域を支配した。

ヒナの斬撃は、体に似合わないほどの重みを持っていた。  
受け止めた手が痺れるほどだ

そこからの連撃、まさに達人の域だった。

「神道流剣術 双の舞、一の太刀 刃迅・紅焰」

刀に纏わせた霊気を二本の刀で摩擦し、炎を作り出し衝撃波に寄せ  
相手に伐つ

それが刃迅・紅焰だ

ヒナが放った炎の衝撃波が俺を襲う。

あいつ、道場を燃やす気か！俺が受け止めてなかったら、どうなっ  
ていたか・・・

「腕は、鈍ってないみたいだね」

こいつ、俺が受け止めるとわかって・・・

「俺も本気で行かせてもらうぞ・・・ちゃんと受け止めるよ？」

「えっ？ちょ！まって・・・」

俺は、言葉を最後まで聞かずに、一歩踏み込む、そして・・・

「神道流剣術 六の太刀 塵・牙界崩し」

突進しながらの剣技、受け止めたヒナは、踏みとどまれず10m後  
ろに飛ばされる。

彰は、ヒナが手放した一本の木刀を空中で握る。彰の獲物は二本になった

「神道流剣術 双の舞 千刃の舞」

霊力で作られた刃と共に彰が操る木刀が舞う

数瞬後にはヒナは道場の床にへたりと尻餅をついていた。

「ひ、ひどいよおお」

ヒナは、泣きべそをかきながら折れた木刀を見る

そんな事より・・・

「ヒナ、お前今、すごい格好になっているぞ？」

ヒナの袴は、連撃のせいですたぼろになっていた。

真っ赤になりながら、口をぱくぱくさせるヒナ。

「何が腕は鈍ってないみたいだねだよ、ヒナお前の方が弱く弱くなつたんじゃないのか？」

笑いながら手を差し出す。

ヒナは立ちながら

「お兄ちゃんが強いだけだよ！なんで3年以上もやってないのにそんなに強いのかさ」

そういえば、そうだ。

体がまだ昔の事を覚えているのか、頭で考えずとも動いてくれる記憶が封じられていたからなのか、あの世界に巻き込まれたからなのか理由は定かではないが・・

「ぐううう」

どこからか、お腹の音が鳴った。俺では無いとすると・・

俺は目を見開きながらヒナを見るとそこには、顔を真っ赤に染めたヒナがいた。

もう朝食が出来始める時間だ・・・

「飯食べに行くか」

俺は笑いながら扉を開ける

「うん！」

今日の飯は何だろうな。

俺はそう思いながら一歩踏み出した

## 双子の姉登場！

朝練が終わり、シャワーで汗を流し終わった俺は、普段着に着替えて居間に向かった。

そこには今日の朝食があった。

「おお、うまそうだな！」

俺は自分の席に着く、すぐにヒナが来た。

俺より先にお風呂に入ったのに・・・まあ女の子だからか

ヒナは自分の定位置と言わんばかりに俺の隣に座る

「ん？ヒナは向かいじゃなかったっけ？」

「良いじゃん！そんな事」

まあ確かにこのうまそうな朝食の前ではどうでも良い事だ。

そうこうしている間に母の千鶴が席に着く

「あれ？父さんと双葉は？」

「お父さんはまだ眠っているわよ、双葉はもうすぐ帰ってくると思っけど・・・」

聞く所によると、双葉は妖怪退治に行っているらしい、まだ14歳というのに・・・

双葉の実力は昔の俺と匹敵するほど強くなっているらしいから大丈夫だと思うが

朝の稽古の話をしながら、食べていると廊下の方から何か走ってくる音がした。

「来たか・・・」

そうそうにご飯を食べ終え、何があっても安全なように広い場所を作る

ふすまが開く、そこには双子の姉の双葉がいた。

「お兄様、お久しぶりです。逢いたかったです。」

双葉はそう言いながら俺の懷に突っ込んでくる。

この感覚、予想はしていたけど・・・きついというか何このデジャブ

「あゝ、お姉ちゃんだけずるい！」

私もーと言いながらヒナも入ってきた。

さすがに、2人は抱えられんぞ！

こらえ切れず妹二人に押し倒される格好になる。

端から見たら美人な娘達に押し倒されているという、とても幸せな場面なんだろうが、

本人からしたら息苦しくてならない。

「二人とも、まだご飯食べ終えてないでしょ！早く食べなさい」

母が助太刀してくれたおかげで、妹達は自分の席に着く。

着いた席が二人とも俺の隣と言うのはどういう事なんだ・・・

いただきます・・・と言い、おいしそうにご飯を食べているこの妹達は

この業界・・・陰陽師の中でもトップクラス・・・いや、後数年で実際にトップを張る実力になるであろう。逸材だ。

しかし、目の前でご飯を食べながらおしゃべりをしている。女の子達が最強ね・・・

庭では、雀がさえずり穏やかな気分になる。

さて今日は何をしようか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2735p/>

---

逢魔時の夜

2011年10月8日11時41分発行